

諏訪流放鷹術

スポーツ人類学研究領域

5006A014-9 大塚紀子

研究指導教員： 寒川恒夫教授

本研究の目的

鷹狩の技術は、『日本書紀』によれば 4 世紀に渡来人によって日本に伝えられたとされ、その後日本人の手によって新たな流派が生まれた。『放鷹』に拠れば、呉竹流、政頼流といった流派である¹。この政頼流を継承したとされるのが諏訪流、大宮流²、あるいは禰津流³であるといわれる。そして現代に継承されていることが確認できる流派は吉田流と諏訪流の二つしかなく、その中でも長い歴史を持ち、吉田流を含めた他の派生した流派と非常に関連性の深い流派が諏訪流である。

諏訪流は諏訪大社の御射山(みさやま)祭において、鷹で捕った獲物を生贄として奉納する贄鷹(にえたか)の神事を行っていた⁴流派である。諏訪流が各流派に与えた影響は非常に大きいと考えられているにもかかわらず、諏訪流の技と心に関する研究は筆者の知る限り、存在していない。

そこで本研究では、現代に伝承される諏訪流継承者に伝えられてきた『小林家伝鷹書』を分析し、文章化され、継承されてきた諏訪流の技と心を明らかにするとともに、当代継承者によって文章によらずに伝承された部分を、筆者自身の体得及び聞き取り調査によって文字化することにより、諏訪流放鷹術に関する情報の全貌を明らかにすることを目的とする。

第1章 日本の鷹狩と諏訪流

鷹狩の流行に伴い研究書の必要性が高まると、嵯峨天皇は日本初の研究書である『新修鷹経』三巻を鷹所に下賜し、818 年には天下に頒行した。これによって鷹狩の技術が広まったと考えられる。

宮廷の鷹の家としては鎌倉時代、西園寺家が生まれ、次いで持妙院家が生まれた。『尺素往来』によれば、室町中期の鷹の家柄は、宮廷では園、坊門、楊梅家、地下人では秦、下毛野であるという。

日本の鷹狩文化の発展において最大の功労者である徳川家康は優れた鷹匠の雇用にも熱心で、文禄元年(1592)には後北條氏の鷹匠、間宮左衛門信繁を雇用、鷹匠頭とした。間宮家は禰津流もしくは諏訪流の系譜にあったとされ⁵代々鷹匠頭を世襲したが、

享保年間(1716～1736)に断絶した⁶。

鷹匠頭は間宮、戸田家が任じられていたが、間宮家が断絶したことから小栗、森川、小林、能勢の諸氏がこれにあたった。

が、明和 7 年(1770)から千駄木が内山家、雑司ヶ谷が戸田家の世襲とされた。

現代に伝えられる諏訪流は『寛政重修諸家譜⁷』によれば小林家次(後の家鷹)を初代とするものであるとされる。が、その後の小林家は大番に名を留める程度で、再び鷹匠として登場するのは十三代鳩三からである。

第2章 鷹書に見る諏訪流放鷹術

『小林家伝鷹書』は、天正 13 年(1585)以前に存在していた啓蒙集巻一と二に、浅利氏が鷹の灸に関する抜書を加え、後半は宝暦 6 年(1756)に小林家か小林家に近い人物が鷹書を加え、諏訪流の鷹書として一冊に製本したと推測されるものであった。

現段階で成立時期が明らかであり、諏訪流の家柄に伝えられている鷹書としては最も古いものと考えられる。

内容については全体を概観すると、以下のような特徴があげられる。

1. 歴史情報

諏訪の四仏、在原業平と鳥柴の由縁、源政頼からの伝承の経緯、贄鷹の説明等、鷹匠が知っておくべき歴史情報。

2. 形式情報

鷹道具の寸法や條の繋ぎ方、鷹の見せ方、渡す順番の礼法、鷹の薬等、記録しておかなければ実践できない形式情報。

3. 極意情報

鷹の能力別、獲物別の羽合せ方とタイミング、狩場における鷹の動作の意味等、鷹の調教に関する情報について、鷹匠の技としてはそのコツを説く。羽合のような素人がこれを読んで同じように行おうとしてもできない類の極意情報。

第3章 今日に伝わる諏訪流放鷹術

現在継承されている諏訪流放鷹術の筆者自身に

¹ 宮内省式部職編纂『放鷹』昭和 6 年吉川弘文館発行。p. 20、21。

² 同上、p. 21。

³ 同上、p. 39。

⁴ 同上、p. 24。

⁵ 根崎光男『将軍の鷹狩り』1999 年、同成社発行。p. 51

⁶ 西山松之助『家元ものがたり』昭和 51 年中央公論社発行。P. 102

⁷ 昭和 39 年続群書類従完成会発行、巻第六

よる体得及び当代継承者への聞き取り調査によって、今日の諏訪流鷹術を明らかにする。

今日の諏訪流鷹匠の技は、先代花見及び当代田籠が体得、伝承したものを基にしている。その技の体得は鷹の調教、猟法、鷹を冴えた鷹にするための技法を段階的に行うことによって果たされる。

そしてそのためには「据え」などの基本的な技と、「肉色(しし)当て」などの応用的な技が設定される。

結章

以上のことから、現在に伝承されている諏訪流鷹術は、『小林家伝鷹書』によって文字化された情報

においては、歴史、形式、極意情報が扱われ、口伝によって言語化された文字によらない流派伝承の情報では、鷹の基礎的な調教から狩の仕方、さらに鷹の能力を高めるまでの実践情報が扱われる、とまとめられる。

諏訪流では、鷹匠はまず実践による基礎の体得と鷹書による歴史的知識の学習を行い、鷹匠の技が上達した段階で鷹書に記されたような極意の体得をめざしたのである。

したがって鷹書をすべて読み解くためには、体得技術が前提となる。